新教科群４）

共生と平和の科学
『子どもの人権』『環境』『ジェンダー』を軸に共生と平和を考える
―生徒アンケート　３年間の年次比較―

原　　順子・高橋伸行
三小田博昭・野田真里※(1)
高井次郎※(2)・佐藤良子※(3)

【抄録】「共生と平和の科学」が、高２の後期に必修科目として開講されて３年になった。毎年生徒の集録を作成し、最後の授業で生徒に振り返りアンケートを実施している。我々はよりよい授業を目指して、過去２年の本紀要に報告してきたように授業研究を行ってきた。今回は３年間のまとめとして、生徒アンケートの年次比較を行い、我々の取り組みの成果と課題をまとめてみた。

【キーワード】 新教科　共生　平和　子どもの人権　環境問題　ジェンダー　アンケート

1. はじめに

初年度の成果は、それぞれのグループで小テーマを学ぶ意義が十分あったこと。課題は教員も生徒も各テーマを理解し、考えるのが精一杯で、３つのテーマの中から共生と平和につながる共通性、法則性を見いだすことができなかったこと。２年目の成果は他のテーマは何を学んでいるのかということを気にするだけのゆとりができた。そこで学びの段階を合わせていこうと授業の流れを［導入→探求Ⅰ→探究Ⅱ→まとめ］と決めたこと。課題は合同授業の内容選択と、どの段階で行うかを決めることである。それぞれの担当教員の思惑やゲストの都合を考慮しながら、２グループだからこそ出来ること、必要な内容、タイミングを検討していくことである。３年目はこれまでの課題を踏まえて合同授業での学び合いを重視した。成果は３つのテーマはどれも共生と平和を実現するのに大切な要素であると生徒に考えさせることができたこと。課題は合同授業を多くしたために、１つのテーマを深く探ることができたか、というジレンマが残ったことである。授業者はこのように３年間を振り返ったが、生徒はどのように感じていたのか、アンケートの３年間分をまとめ、授業者の意図と生徒の受け止め方の共通点や相違点を探ってみたい。

2. 目標と授業形態

１）目標

① 地球上の様々な集団が互いに認め合い、平和に共生共存できる可能性を探ることができる。

② 同じ時代を生きる身近な人々や地球上の遠く離れた人々の生活に関心を持つことができる。

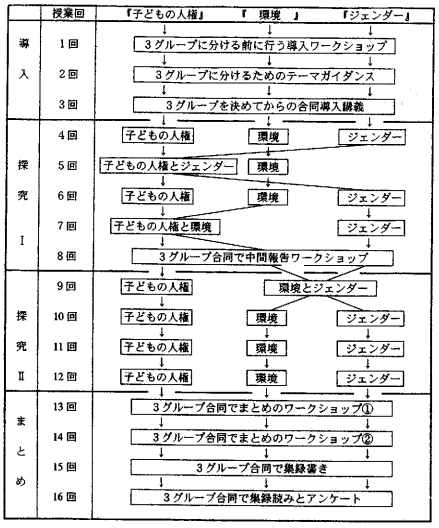
③ 共生社会の実現のために自分たちに何ができるかを考えて行動することができる。

２）授業形態

① １クラス40人の生徒が３つのテーマから１つを選び、教員３人で同時展開していく。１グループは12～14人で、生徒の希望が優先されるが、偏る場合は第２希望になる生徒がいる。３年間を通して極端な偏りはなく、第２希望になる生徒は10名程度である。第１希望のみでグループ分けすると、個々のワークに支障が出るのでやむを得ない。毎年希望が多いのは『子どもの人権』である。

② １グループのみで行う授業の他に、２グループ合同、３グループ合同の授業を行い、リンクしながら学び合っていく。(表１参照)合同授業のときにこの教科の特徴である、学外講師の授業を組んで、多くの生徒により専門的な情報を得られるようにしているが、２年目の課題でもあったように、組み立てが難しい。

表１　全16回の授業の流れ



※(1)　名古屋大学助手（現中部大学助教授）
※(2)　名古屋大学大学院教育発達科学研究科助教授
※(3)　愛知淑徳大学大学院研究生

3. 2004年度 「共生と平和の科学」　TEACHING PLAN

DATE　10月15日（金）～3月11日（金）

テーマ			『子どもの人権』 ―貧しさと豊かさ―	『環境』 ―ヒトと地球―	『ジェンダー』 ―女と男―
内　容			子どもの人権に焦点をあて、世界の子たちを垣間見ながら、自分たちの今の生活を振り返る。	「自然」と共存するとは、限られた資源のもとで人々が共に暮らすとは。「環境ブーム」の今、改めて問い直す。	共に生きる家族、友達。身近な共生と平和をジェンダーの視点から探る。身近なことだと思っていると…。
担　当			三小田・佐藤	高橋・佐藤	原・佐藤
回	月	日			
導　入　（問題に気づく）					
1	10	15	オリエンテーション① 「共生と平和の科学で学ぶこと」★		
2		22	オリエンテーション②―テーマガイダンス―「100人の村」（三小田） 「小さな地球」（高橋）「セックスとジェンダー」（原）グループ希望調査		
3		29	高井・佐藤導入講義・ワーク　★		
探　求　Ⅰ　（現状を知る）					
4	11	5	写真から見る「貧しさと豊かさ」 フォトランゲージ	熱帯雨林の姿	ジェンダーを見つけよう① 「らしさ」と「好ましさ」
5		12	世界の中のジェンダー① 「途上国の子どもと女性」 担当（佐藤）☆	実習 大気汚染をチェックする	世界の中のジェンダー① 「途上国の子どもと女性」 担当（佐藤）☆
6		26	子どもの権利条約 ユニセフ	ちょっと待ってケナフ	ジェンダーを見つけよう② 「言葉とジェンダー」
7	12	3	児童労働の裏側にあるもの 「データから見る世界」	文化と性役割観 （高井先生講義）☆	文化と性役割観 （高井先生講義）☆
8		10	中間報告会（ダイアモンドランキング）　★		
探　求　Ⅱ　（問題を深める）					
9	1	17	パーム椰子の話 ☆	パーム椰子の話 ☆	メディアリテラシー① 新聞・雑誌から読み解く
10		14	識字率	冷静な環境学①	メディアリテラシー② ＴＶ・映画が発するもの
11		21	リプロダクティブ・ ヘルス・ライツ	冷静な環境学②	世界の中のジェンダー② ＨＤＩとＧＥＭ
12		28	日本のＯＤＡ	「環境を守るとは何か」 （武田先生講義）	世界の中のジェンダー③ ノルウェーに学ぶ
ま　と　め					
13	2	4	『共生と平和の鎖』カード作り★		
14		18	『共生と平和の鎖』鎖つくり・振り返り★		
15	3	4	集　録　書　き　★		
16		11	集　録　綴　じ　・　ア　ン　ケ　ー　ト★		

★３グループ合同授業　　☆２グループ合同授業

4. アンケートの概要

１）目的

問［１］:教師が期待する、この授業で身に付く力を生徒はどのように受け止めたかを知る。

①　この授業の特徴で得られる力を生徒はどのように受け止めたか。

特徴１：複数の教員　－１）
特徴２：学外講師の授業　－２）
特徴３：扱う題材　－３）
特徴４：答えの出にくい問題　－４）

②　生徒はこの授業によってどのような力が身に付くと考えるか。　－５）～－９）

③　生徒はこの授業で得た力を、どのように活用できると考えるか。　－10）～－15）

問［２］:この授業と他の教科を比較し、この教科の独自性を生徒はどのように受け止めたかをみる。

①　この授業の特徴と学習の動機づけ　－１）～－３）
②　既存の教科との比較　－４）～－７）
③　総合人間科との比較　－８）～－10）

２）実施方法

	年月日	人　数
02年度	2003／３／13	104人
03年度	2004/３／16	108人
04年度	2005／３／11	114人

授業の最終日に無記名で実施

３）結果から比較した数値

肯定的な回答をした生徒の人数を割合で数値化し、グラフに示した。ただし、02年度は下のように他の年度と異なる。

①　回答選択肢の違い

02年度	
１：まったくない ２：あまりない ３：まあある ４：とてもある	肯定は ３と４の合計人数

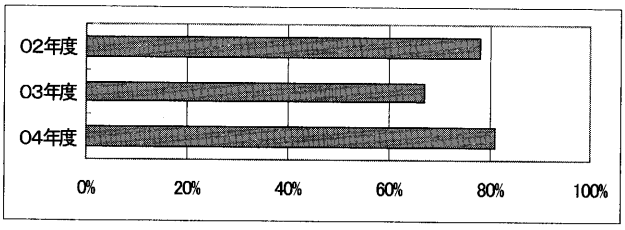
03・04年度	
１：とてもそう思う ２：そう思う ３：どちらでもない ４：あまりそう思わない ５：そう思わない	肯定は １と２の合計人数

②　02年度は初年度につき、他の年度と異なるものがある。文言が異なるものは項目の下に02年度の質問を（　）で表記した。値のない項目は、質問していないので空欄のままにした。

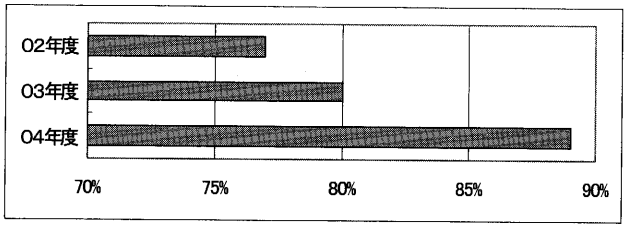
5. アンケート結果

問［１］共生と平和の授業を受けてきた現時点での自分の考えを番号で答えてください。

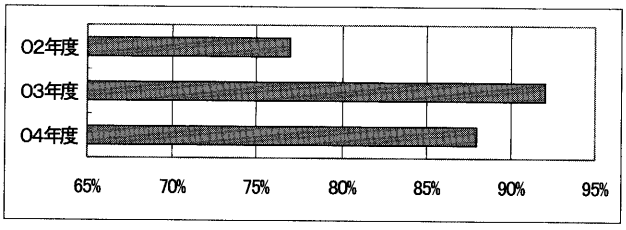
１）１つの授業に複数の教員が関わることにより、様々な視点からの知識が得られると思う。
（１つの授業に複数の教員が関わることにより、多様な視点を学ぶことができる。）



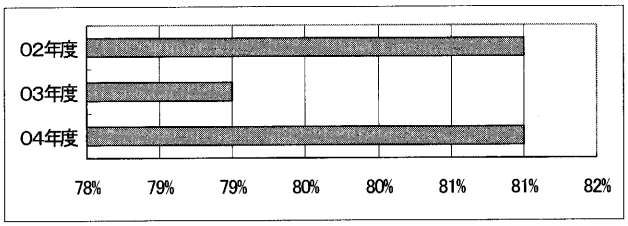
２）学校外の先生の授業では経験的、専門的な知識が得られると思う。
（学外講師の授業の専門的な話を聞くことが、知的刺激になる。）



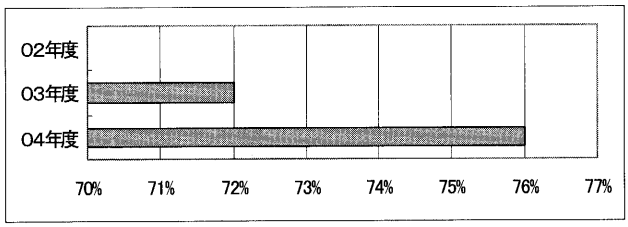
３）様々な問題が入り組んだ現代的な社会問題に関する知識が得られると思う。
（他の授業では継続的に学習できない社会問題などをリアルタイムで学ぶことができる。）



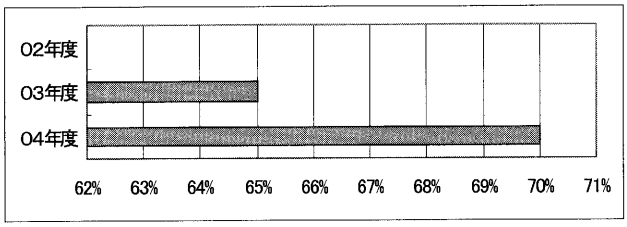
４）「共生と平和の科学」で扱ったような“答のでにくい問題”について学習することは大切である。
（答えの出ない課題について自分なりの考えを持つ機会となった。）



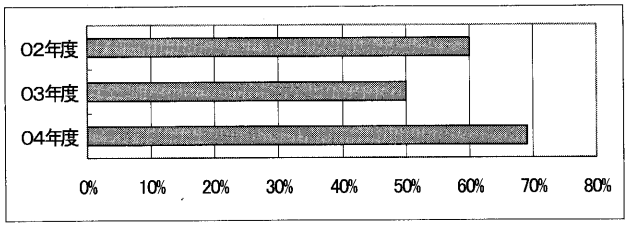
5）「共生と平和の科学」で学習したような問題に対して自分の意見や、考えを持つようにしている。



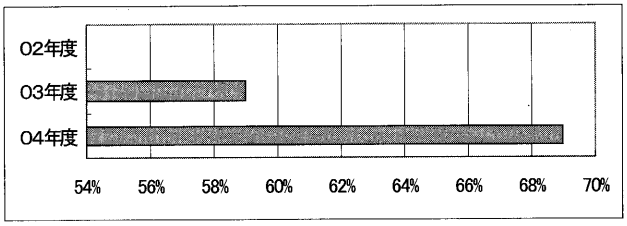
6）「共生と平和の科学」で学習したような知識を活用して自分の意見を組み立て、自分なりの考えを持つようにしている。



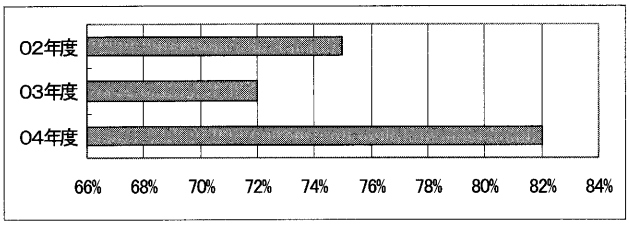
7）１つの大きなテーマを３つのグループの視点から多元的に考えることができると思う。
（１つの大きなテーマを３つのグループの視点から、多角的に考えることができた。）



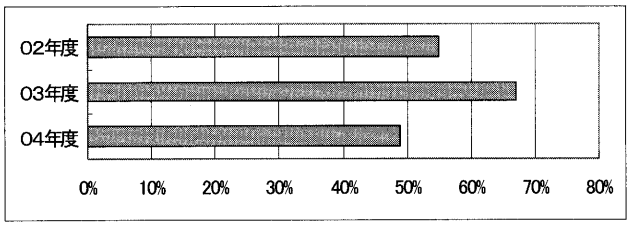
8）１つの課題について深く分析したり、幅広く考えてまとめたりする力を持てると思う。



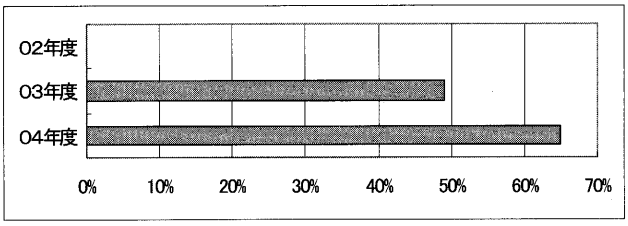
9）「共生と平和の科学」の授業を通して、自分の教養を深く広くすることができると思う。
（新教科の活動を通して、自分の教養が深く広くなったように思う。）



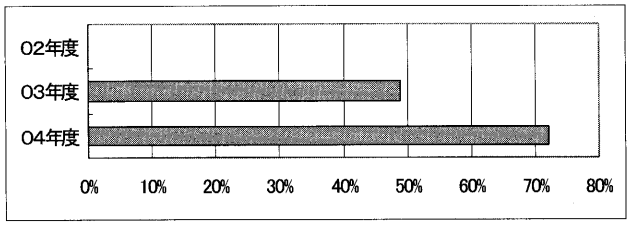
10）「共生と平和の科学」の学習がこれからの自分の進路選択や自分の生き方の助けとなると思う。



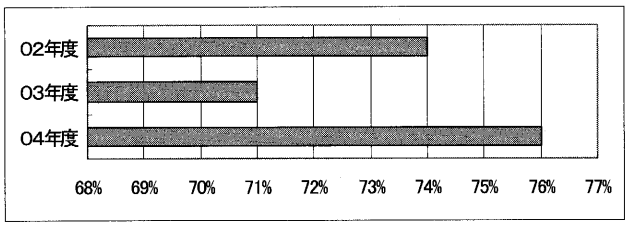
11）「共生と平和の科学」で学んだことを現実の生活や社会で応用し役立てようと思う。



12）「共生と平和の科学」で学んだことをこれから自分が直面する問題や社会問題を考える際に活用していこうと思う。

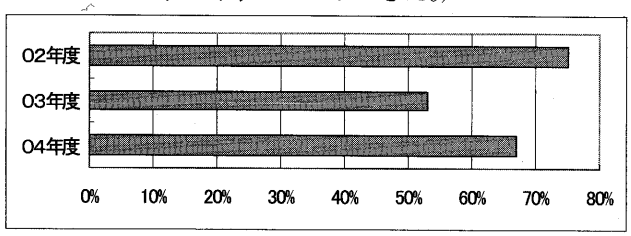


13）「共生と平和の科学」で学習した内容について自分の問題意識が高くなると思う。
（新教科の取り組みを通じ、自分の知識、学習意欲や問題意識などが向上していると思う。）

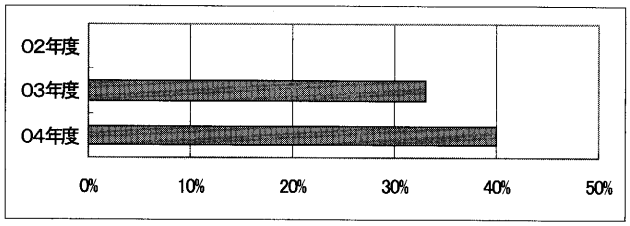


14）「共生と平和の科学」の学習では知識のみでなく、体感することができ関連する事柄への関心が高くなると

思う。
（新教科群の活動を通して知識のみでなく、体感することができて、楽しく学ぶことができた。）

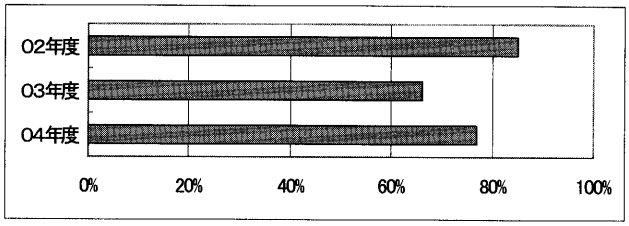


15）「共生と平和の科学」で学習した内容に関連する既存の教科学習の内容についても深く学ぶようになると思う。

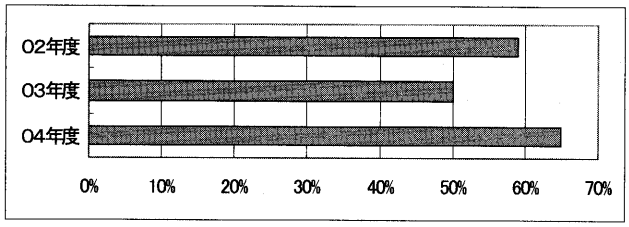


問［２］「共生と平和の科学」という教科についての次の質問に番号で答えてください。

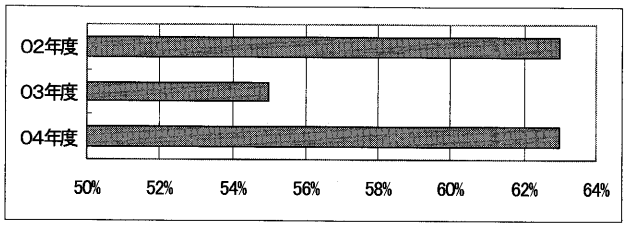
１）少人数で学習したために疑似体験など多様な学習活動ができると思う。
（少人数で学習するので、多様な活動ができる。）



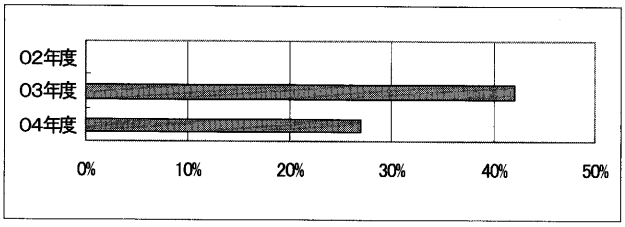
２）「共生と平和の科学」の学習を通して、学び方の多様性が身に付けられると思う。



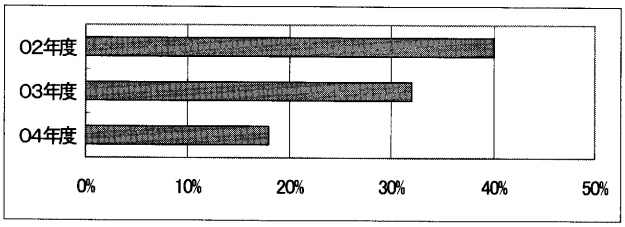
３）３つのグループの中から選べることが意欲的に取り組むことにつながると思う。



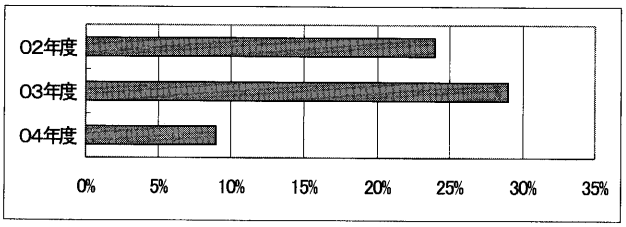
４）「共生と平和の科学」で１つのテーマを詳しく学んだことが、既存の関連する教科（例、英語国語等）を意欲的に取り組むことにつながると思う。



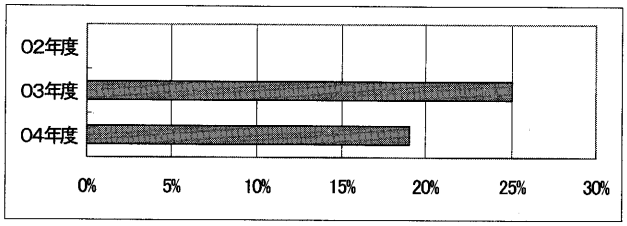
５）「共生と平和の科学」で学習することにより、他教科の学習時間が減って、他教科の学力が低下したと思う。



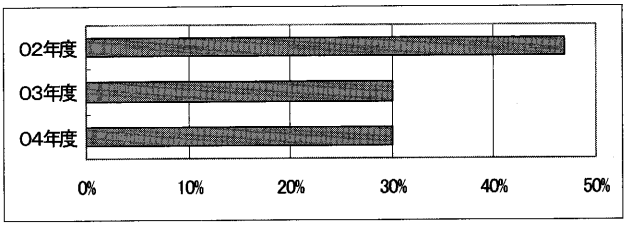
６）「共生と平和の科学」は週１時間では時間が足りないので時間数を増やして欲しいと思う。
（新教科群は週１時間では足りないので増やして欲しい。）



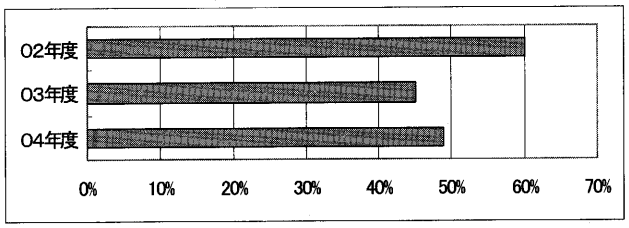
７）「共生と平和の科学」を週１時間学ぶより他教科の学習がしたいと思う。



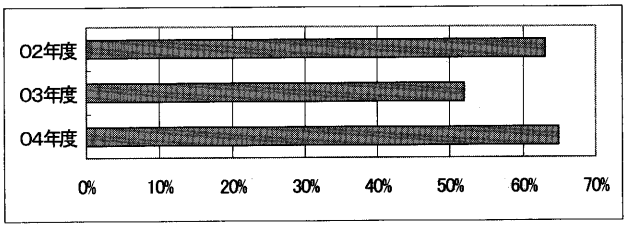
８）総合人間科より「共生と平和の科学」の方が、学習の目的がはっきりしていると思う。



9）総合人間科の方が自分のペースで深く学習することができると思う。



10)「共生と平和の科学」は、総合人間科以外の他教科より、友人や教員などとともに“人と学びあう”機会が多いと思う。
（新教科群は、総合人間科以外の他教科より、友人や教員などの“人と学びあう”機会が多いと思う。）



6. 考察

1）全体

① 肯定値は3年間を通して、高い値の項目と低い値の項目が、共通していた。

〔肯定値が高い項目〕

・［1］－3）様々な問題が入り組んだ現代的な社会問題に関する知識が得られると思う

・［1］－2）学校外の先生の授業では経験的、専門的な知識が得られると思う

〔肯定値が低い項目〕

・［2］－6）「共生と平和の科学」は週1時間では時間が足りないので時間数を増やして欲しいと思う。

・［2］－7）「共生と平和の科学」を週1時間学ぶより他教科の学習がしたいと思う。

考察

生徒は3年間を通して、この授業の特徴である、題材が今日的な問題であることや、学外講師の授業を肯定的に受け入れている。しかし、時間数を他教科に回して欲しいとは言わないが、週1時間で十分だ、と思っていることがわかる。高2の後期というと大学受験に不安を持ち始めるときだ。まずは大学に入ることを、と考える気持ちはわかる。

② 03年度の肯定値が、他の年度に比べて低いものが多い。

考察

意外な結果であった。02年度の選択肢には「どちらでもない」がないので、02年度が他の年度と値が異なると予想していた。03年度と他の年度との違いを振り返ってみると、2グループ合同の授業に苦心した点だ。それぞれのテーマの流れと合同授業の日程を合わせることが難しかった。肯定値の低さの原因がここにあるとすれば、生徒は自分が探究したいテーマには、合同授業の必然性を感じなかったのだろう。04年度は授業者が互いに他のテーマを意識しながら進めたので合同授業の唐突さはなかったが、これから先も気をつけて行きたい点だ。03年度の特徴はもう1つある。「［1］－10)「共生と平和の科学の学習がこれからの自分の進路選択や自分の生き方の助けになると思う。」—この肯定値が他年度より10%も高かった点である。理由はわからないが、個々の生徒の受け止め方に開きのある年度であった。

2）アンケートの目的に照らして

問［1］:教師が期待する、この授業で身に付く力を生徒はどのように受け止めたかを知る。

① 教師が期待する、この授業の特徴で得られる力を生徒はどのように受け止めたか。　－1）～－4）

考察

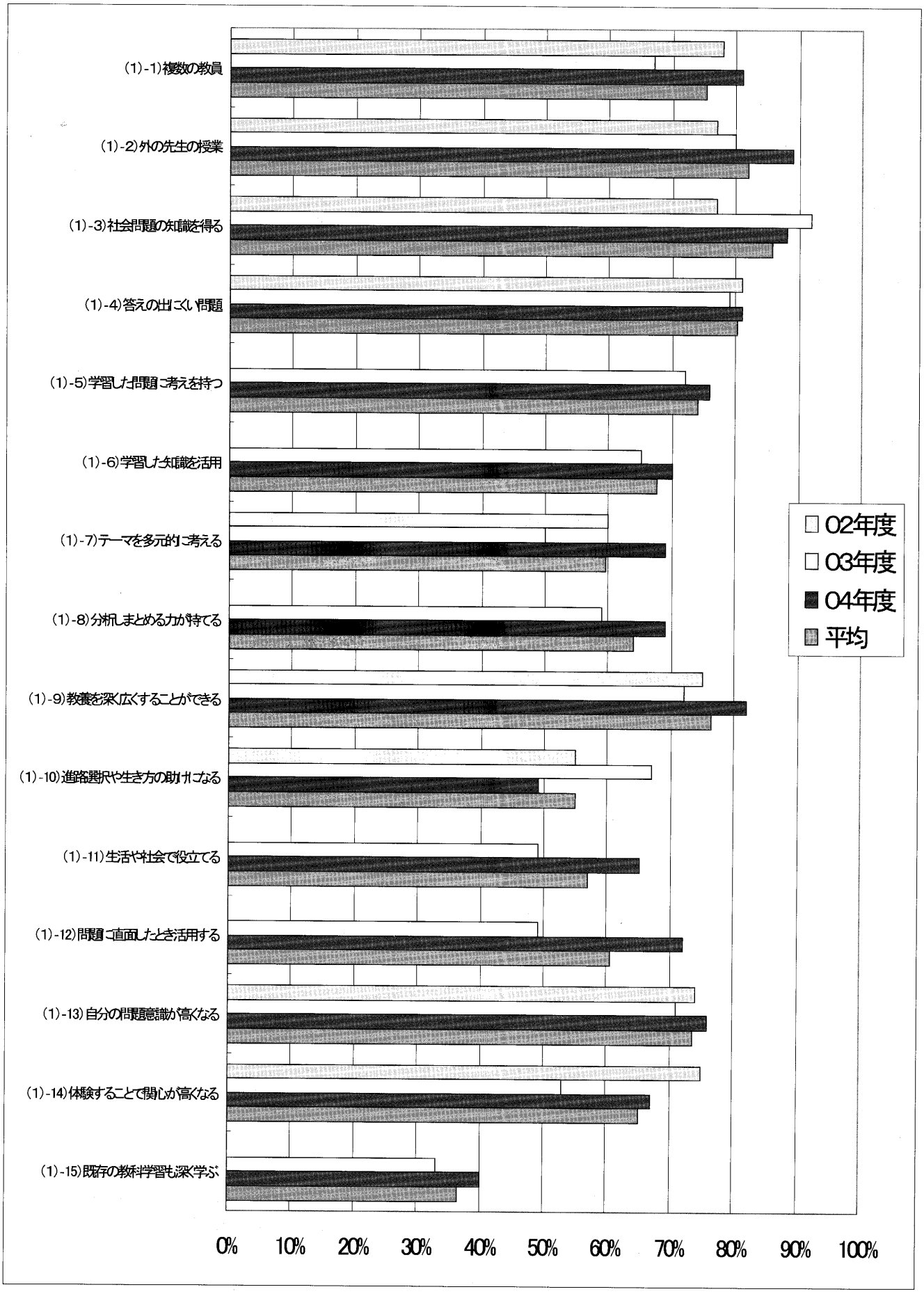
80%とおおむね良好に受け入れている。03年度は扱う題材が高く、04年度は学外講師の授業が高い値になっている。講師の先生方は主に1つのテーマについて講義をしていただくが、事前に他のテーマで学んでいることを説明しておくと関連した内容を入れて下さる。学外講師の肯定値が年度ごとに高くなっているのは、先生方を資源としてよりよく活用できるようになってきたためと考える

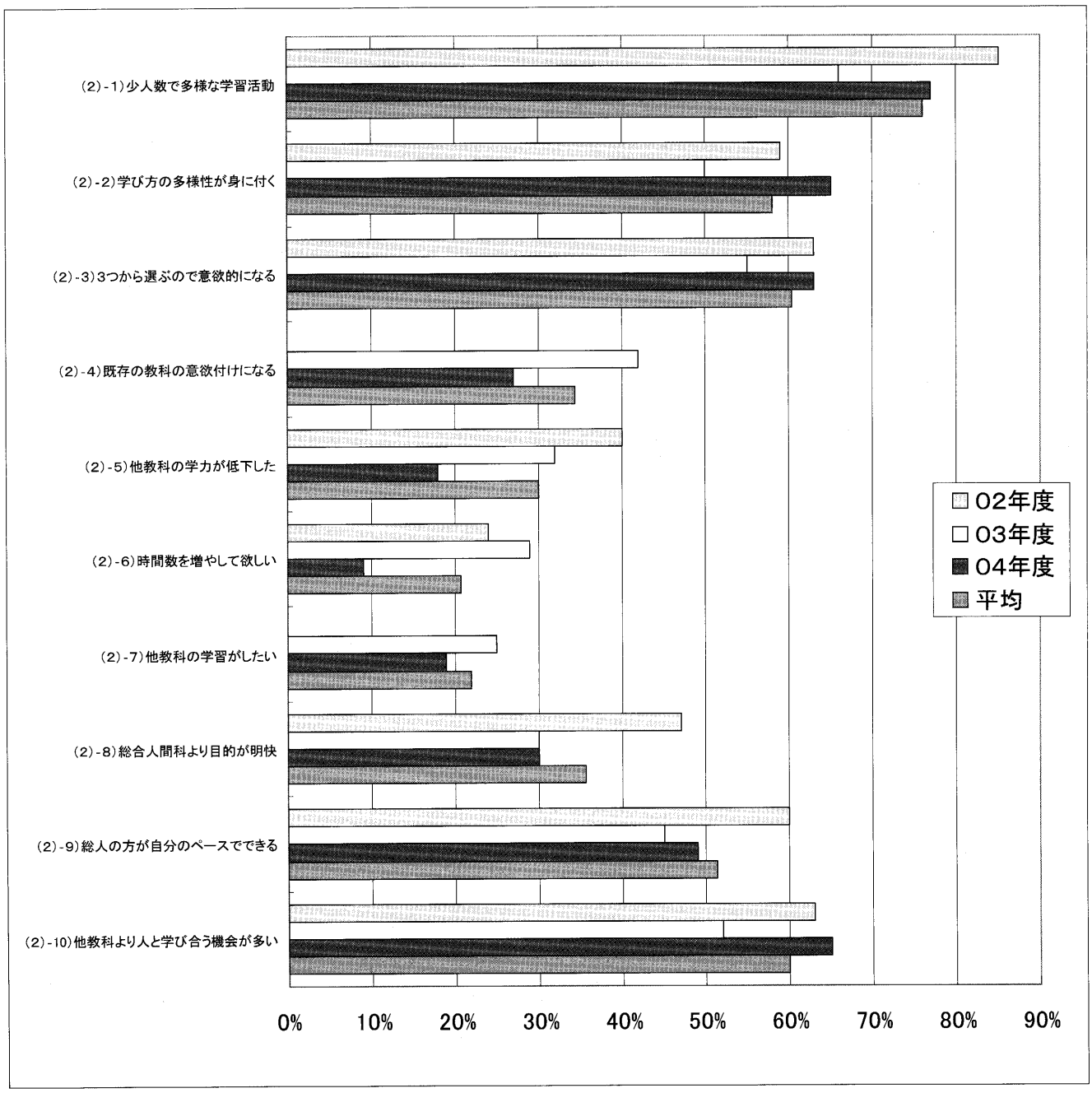
② 生徒はこの授業によってどのような力が身に付くと考えるか。　－5）～－9）

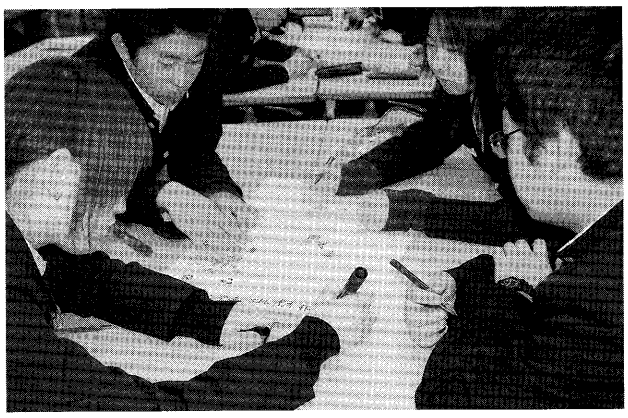
考察

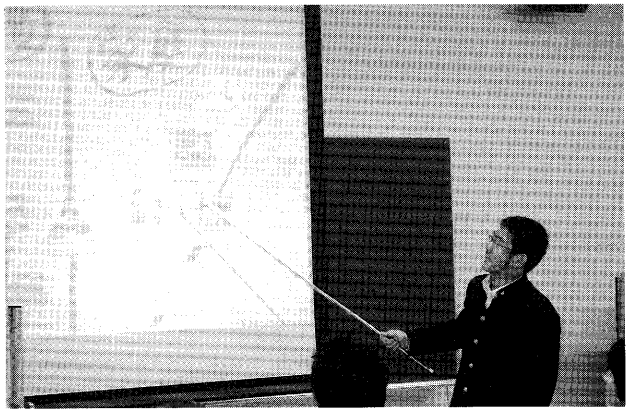
「多元的に考えることができる－7)」は平均で60%と一番低い。授業を受ける生徒は3つのテーマから選択をして1つを選んでいるので、3つ学習しているとは考えにくいのでだろう。04年度は合同授業の機会を増やしたので70%だが、その分単独授業を減らすことになる。この授業で教養を深めることはできるが、物事を多元的に考えたり、分析しまとめる力までつくかは断言できないというのが多くの生徒の受け止め方か。

③ 生徒はこの授業で得た力を、どのように活用できる


(1)-1)複数の教員
(1)-2)外の先生の授業
(1)-3)社会問題の知識を得る
(1)-4)答えの出にくい問題
(1)-5)学習した問題に考えを持つ
(1)-6)学習した知識を活用
(1)-7)テーマを多元的に考える
(1)-8)分析しまとめる力が持てる
(1)-9)教養を深く広くすることができる
(1)-10)進路選択や生き方の助けになる
(1)-11)生活や社会で役立てる
(1)-12)問題に直面したとき活用する
(1)-13)自分の問題意識が高くなる
(1)-14)体験することで関心が高くなる
(1)-15)既存の教科学習も深く学ぶ
02年度
03年度
04年度
平均
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%


(2)-1)少人数で多様な学習活動
(2)-2)学び方の多様性が身に付く
(2)-3)3つから選ぶので意欲的になる
(2)-4)既存の教科の意欲付けになる
(2)-5)他教科の学力が低下した
(2)-6)時間数を増やして欲しい
(2)-7)他教科の学習がしたい
(2)-8)総合人間科より目的が明快
(2)-9)総人の方が自分のペースでできる
(2)-10)他教科より人と学び合う機会が多い
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
02年度
03年度
04年度
平均

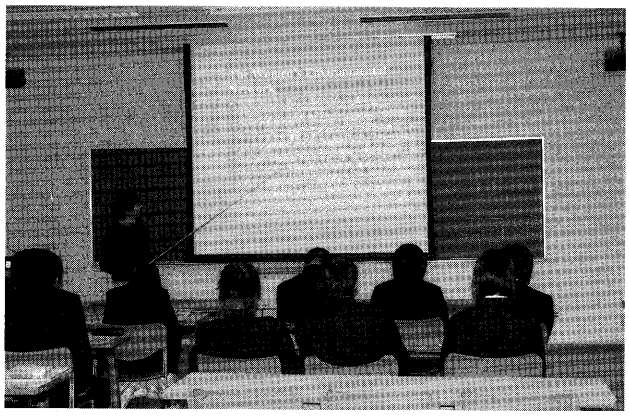




と考えるか。　－10）～－15）

考察

－1）～9）と比較すると肯定値は低くなっている。この授業で知り得たことについては、今後このような問題に直面したときに考えていけそうだ、すぐに生活に活かせるかは自信がない、ということか。授業者としては納得できる十分な値である。



問［2］：この授業と他の教科を比較し独自性をみる

①　この授業の特徴と学習の動機づけ　－1）～－3）

考察

少人数での学習活動に対して、02年度の肯定値が80%を超え高い。一貫してワークショップ中心の授業であるが初年度はてテーマごとにそれぞれがワークをしていた。個々ではおもしろかったが他のテーマと学び合うことが少なかった。3年間で学び合いの機会を増やしてきたが、少人数でのワークは一人一人が活きるので、バランスを検討しながら今後も大切にしていきたい。

②　既存の教科との比較　－4）～－7）

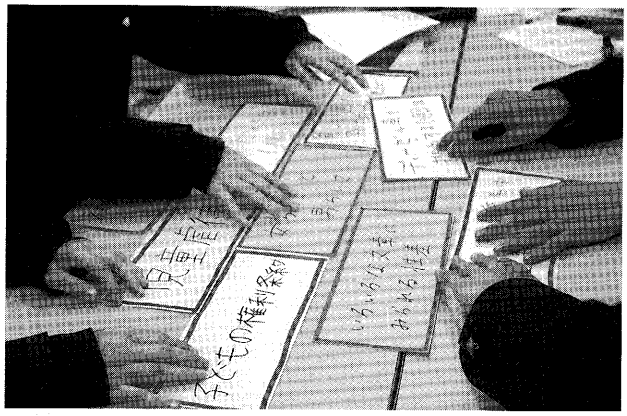
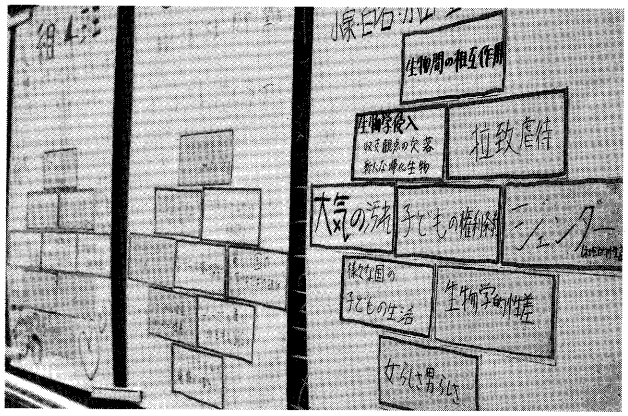
考察

これまでの結果をみる限り、生徒はこの授業を肯定的に捉えていた。「－5）「共生と平和の科学」で学習することにより、他教科の学習時間が減って、他教科の学力が低下したと思う。」の肯定値が順次低くなっている。これで3年間継続したために、一定の評価を得てきたことがわかる。しかし、「－6）時間数を増やして欲しいと」「－7）他教科の学習がしたい」の肯定値がともに平均で20%である。肯定的・否定的は共に20%でも、年度によって傾向は異なった。03年度は－6）－7）ともに25%を超え、先に述べたように、個々の生徒の受け止め方に開きのある年度で、もっと学びたい生徒と、他教科の方がよい生徒に分かれた。04年度は他の項目で肯定値が他の年度より高い傾向にあるが、－6）では9%と極端に低い。週1時間ならあってもよい授業、と多くの生徒が考えた年度のようだ。原因となるような授業に大きな変化はないので、受ける生徒側のタイプの違いによると考える。

③　総合人間科との比較　－8）～－10）

考察

本校の特徴ある授業2つを3つの角度から比較してみた。「－8）目的がはっきりしているか」では肯定値平均で35%であった。授業の進め方は総合人間科より教師主導なので、目的も明確かと期待したが、生徒の受け止め方は違っていた。「－9）自分のペースで学習できるか」では肯定値平均で52%と、総合人間科の方が自分のペースで学習できると答えていた。この授業が高い値を示していたのは「－10）人と学び合う機会が多い」である。3人の授業者、学外のコーディネーター、講師の先生と、教員だけでも半期のうちに6人が授業に関わっている。グループワークで人の意見を聞くことも多い。大テーマが「共生と平和」であるから、題材はもとより授業も共生を意識した形態を取り入れたことがこの結果の原因であろう。

7. おわりに

高校2年生という点が同じだけの、異なる生徒が回答しているアンケートを比較して意味があるのか、という気持ちと、我々が改善してきた点が生徒に反映されているかを知りたい、という気持ちが錯綜しながらの考察になった。数値の違いがどこに起因するか、わからなかった。しかし生徒のこの授業に対する受け止め方は、年度を超えて共通点が多いことがわかった。この年次比較で得た点を4年目以降の授業に活かしていきたい。